

日本独文学会
秋季研究発表会
JGG-Herbsttagung 2014

2014年10月11日(土)・12日(日)
Am Sa., 11. und am So., 12. Okt. 2014

第1日 午前9時50分より
第2日 午前10時00分より
1. Tag: ab 9.50 Uhr
2. Tag: ab 10.00 Uhr

会場 京都府立大学

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
Tel. 075-703-5249
(京都府立大学・ドイツ言語文化 青地研究室)
E-Mail: tagung2014kpu@jgg.jp

参加費：1500 円
(学生会員，常勤職のない会員は1000 円)

※10月11日(土)は、同じ建物の104教室で、他団体の催し物が予定されています。ご注意ください。
【Achtung!】 Am 11. Oktober findet im Raum 104 die Veranstaltung einer anderen Organisation statt.

第1日 10月11日(土)

開会の挨拶 (9:50~9:55) A会場 (102教室)

京都支部長 松村 朋彦
会 長 渡辺 学

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場 (102教室)

名前の詩学

—文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題

Poetologien der Namen

**—Probleme der Namen in der deutschsprachigen Literatur
vom Mittelalter bis zum 20. Jahrhundert**

司会：前田 佳一

1. 名前の詩学への導入
—インゲボルク・バッハマンの講演『名前との付き合い』を手がかりに
前田 佳一
2. 名前と作者 —中世俗語文芸における作者性
山本 潤
3. ジャン・パウル『ジーベンケース』における名前の交換
江口 大輔
4. 「そんなの名前じゃないよ」
—トーマス・マン『トニオ・クレーガー』における名前の呼びかけの問題
木戸 繭子
5. 後期リルケ作品における呼びかけ
山崎 泰孝

シンポジウム II (10:00~13:00) B会場 (103教室)

現代ドイツ文学 —境界の揺らぎ

Fluktuation der Grenzen in der deutschen Gegenwartsliteratur

司会：川島 隆

1. ゼロ年代以降のドイツ小説における「語り」の文化折衷論
—S・レヴィチャロフとJ・ブラントにおける「高尚」対「通俗」 眞鍋 正紀
2. ネット時代の文学と「盗作」の問題
—ヘレーネ・ヘーゲマンの『アホロートルを轢き殺す』をめぐって 川島 隆
3. 「故郷」を再現する物語
—メリンダ・ナジ・アボニィ『鳩は飛んでいく』 麻生 陽子
4. アルカヘスト，造形芸術と言語芸術の融和
—キーファーとランスマイアー 徳永 恭子

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) C 会場 (210 教室)

司会：友田和秀・宇和川雄

1. 『パルチヴァール』におけるガーヴァーンの自律性と triuwe 松原 文
2. L.テーク『ツェルビーノ王子』における
メタ・メタフィクションの可能性 山田 よしこ
3. 挿入される経験
—ギュータースローの長編小説におけるエッセイイズムについて 桂 元嗣
4. マックス・フリッシュ『学校のためのヴィルヘルム・テル』
における Recht の所在 寺澤 大奈

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~12:35) E 会場 (203 教室)

司会：田原憲和・鈴木智

1. Digitale Hilfen für das Schreiben in sozialen Netzwerken
— eine Brücke zwischen formellem und informellem Lernen
Ikumi Waragai・Marco Raindl・Tatsuya Ohta
2. Videokonferenzen im Oberstufenunterricht
—Möglichkeiten und Grenzen studentischen autonomen Arbeitens Andreas Riessland
3. 日本語を母語とするドイツ語学習者の語順習得
—処理可能性理論と発話の複雑性から 星井 牧子
4. 教養ゼミナール「ドイツ環境ゼミ」の現状と今後 松岡 幸司

ブース発表 I (11:30~13:00) F 会場 (207 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

イタリア・南チロルにおけるドイツ語教育
—ラディン語地域における複言語教育を中心に

小川 敦・境 一三・大澤 麻里子

ポスター発表 (13:00~14:30) G 会場 (209 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

想起する帝国

—ナチス・ドイツにおける「集合的記憶」に関する考察

溝井 裕一・細川 裕史・齊藤 公輔

ドイツ語における浮き彫り付与

—物語における前景・背景と boundedness

舟本 正太郎

招待講演 I (13:00~14:00) C 会場 (210 教室)

Prof. Dr. Elke Brüggem (Universität Bonn)

Schwarz und Weiß, Orient und Okzident, Islam und Christentum.
Begegnung der Kulturen im „Parzival“ Wolframs von Eschenbach

招待講演 II (13:00~14:00) D 会場 (206 教室)

Prof. Dr. Wolfgang Braungart (Universität Bielefeld)

Literatur und Erziehung. Zu einer Aporie.
Am Beispiel Stefan Georges und aus Anlass der aktuellen George-Renaissance

シンポジウム III (14:30~17:30) A 会場 (102 教室)

中世ドイツ文学における「愛」の諸相
—「ミンネ」が文学テーマ化された意味を求めて
Aspekte der Liebe in der deutschen Literatur des Mittelalters
—**Zur Relevanz der literarischen Thematisierung der *minne***

司会：嶋崎 啓

1. 文学テーマ化される前の *minne* の語義 嶋崎 啓
2. 「高きミンネ」に対するミンネゼンガーの懐疑
—モールンゲンとヴァルターのミンネザングを例に 伊藤 亮平
3. ナイトハルトのミンネザングにおける「宮廷」の役割 田中 一嘉
4. *minne* (愛) における *triuwe* (誠実) の問題について
—『エネアス物語』と『トリスタン』を中心に 渡邊 徳明
5. 準主人公に映し出されるキリスト教的ミンネ理想像
—『ヴィレハルム』のギュブルク (アラベル) と
『散文ランスロット』のガラートを例に 浜野 明大

シンポジウム IV (14:30~17:30) B 会場 (103 教室)

もっと正義を！
—詩的道德を希求する文学の格闘
Mehr Gerechtigkeit!
— **Das Ringen der Literatur um die poetische Moral**

司会：香田 芳樹

1. プラトン『ポリテイア』における詩的正義の可能性とホメロス叙事詩 古澤 ゆう子
2. 「正義の女神は堪え忍ぶものに秤を傾ける」
—ドイツ中世叙事詩に描かれた復讐と法 香田 芳樹
3. 正義か運命か —18世紀家庭劇の展開をめぐる—考察 菅 利恵
4. 教養の再生 —現代正義論への布石 吉永 圭
5. 配分か交換か —近代以降の正義と文学について 大宮 勘一郎

口頭発表：文学 II (14:30~17:05) C会場 (210 教室)

司会：吉田孝夫・西尾宇広

1. ペーター・ヴァイスの戯曲『追究』の劇評史から見る
ホロコーストの記憶 高田 緑
2. ゲオルゲ・クライスの「精神運動年鑑」 松尾 博史
3. Dialogizität des Humors als Grundkonzeption
in Christian Morgensterns Poetologie Herrad Heselhaus
4. 媒介性, 誘惑, 出来事
—ポール・ド・マンのヘルダリン受容をめぐって 林 英哉

口頭発表：文化・社会 I (14:30~17:05) D会場 (206 教室)

司会：山崎明日香・小林哲也

1. ロマニストとゲルマニスティク
—E・R・クルツィウスの著作におけるグリムへの言及 横道 誠
2. アードルフ・ヘンツェの筆跡判定
—そのメディア史および観相学史における意義 遠藤 浩介
3. 「読書の民主化」と「読書の規格化」
—ドイツ連邦共和国の読書文化に対するブッククラブの影響 竹岡 健一
4. ドイツ統一後におけるキューバ表象
—W・ヴェンダース監督音楽ドキュメンタリー『ブエナ・ビスタ・
ソシアル・クラブ』からH・C・ブーフ『ハバナに死す』まで 林寄 伸二

口頭発表：語学 (14:30~17:05) E会場 (203 教室)

司会：佐藤和弘・金子哲太

1. 否定呼応の意味論 —中高ドイツ語を中心に 西脇 麻衣子
2. 「外来語」の意味の変容をめぐって 薦田 奈美
3. 思考内容を表す直接話法に対する引用符の適用について
—トーマス・マンの『ヴェニスに死す』における検証 中島 伸
4. 発話行為副詞類のメタ言語的性質および談話における寄与 高 裕輔

ブース発表Ⅱ (16:00～17:30) F会場 (207教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

スマートフォンを使ったドイツ語アクティブラーニングの実践報告 熊谷 哲哉

懇 親 会 (18:30～20:30)

会場：京都ガーデンパレス

会費：6500円 (学生・常勤職のない会員は5000円)

第2日 10月12日(日)

シンポジウム V (10:00~13:00) A会場 (102 教室)

Ästhetik der Landschaft in der Literatur von Ost und West

Moderator : Hiroshi Yamamoto

1. Imaginationen des chinesischen Gartens in der deutschen Literatur
des 18. Jahrhunderts Arne Klawitter
2. Landschaftsbegriff und -ästhetik als Gehen und Beschreiben
bei Xie Lingyun, Petrarca und Basho Robert F. Wittkamp
3. Landschaft und Symbol bei Goethe Yuho Hisayama
4. Samoa als insula amoena des deutschen Kolonialismus Thomas Schwarz

口頭発表 : 文学 III (10:00~12:35) C会場 (210 教室)

司会 : 熊谷哲哉・林寄伸二

1. ハイน์リヒ・ロッチャーにおける俳優のための音声論の考察
—W. v. フンボルトの言語思想を手掛かりに 山崎 明日香
2. カフカの音モチーフ —『巢穴』における雑音 小松 紀子
3. テクスト内部に圧縮される声
—トーマス・クリングの詩作にみられるメディア論的視座 林 志津江
4. 謎と影の国をさまよう
—クレメンス・マイヤー『石の中』における日本 杵淵 博樹

口頭発表 : 文化・社会 II (10:40~12:35) D会場 (206 教室)

司会 : 今井敦・永畑紗織

1. 灰と鉛の想像力
—アンゼラム・キーファーにおける錬金術とパウル・ツェラン 関口 裕昭
2. 東欧ユダヤ文化の躍動 —イディッシュ演劇研究を
カフカの磁場と政治的バイアスから解放する試み 小倉 直子

3. モノの〈声〉 —1930年頃のジークフリート・クラカウアーの
「空間イメージ」論 大島 直史

口頭発表：文学 IV (10:00~12:35) E会場 (203教室)

司会：奥田敏広・武田良材

1. 自然は跳躍しない —カントとゲーテにおける自然認識の原理 茅野 大樹
2. 普遍的類型としての小説理論？
—Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について 北原 寛子
3. レッシングを演技するフリードリヒ・シュレーゲル
—ロマン主義的批評の生成 胡屋 武志
4. 近代における人間学と『創世記』
—フリードリッヒ・シラーの『モーゼの原典の手引きによる
原初の人間社会についての若干の考察』(1790)を中心に 土屋 京子

ブース発表 III (11:30~13:00) F会場 (207教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

「人魚」文学を扱う授業の実践報告

—多言語文学間の共同研究と教養教育への還元モデル

中丸 禎子・川島 隆・田中 琢三

閉会の挨拶 (13:00~13:05) A会場 (102教室)

京都府立大学 青地 伯水

研究発表会期間中、上記のプログラムに加えて、書店・出版社等による書籍展示が行われます。(書籍展示会場：208教室)